

特定非営利活動法人 日本ハンザキ研究所 会誌



あんこう

創刊号

平成20年9月

「あんこう」は、オオサンショウウオの当地方の呼び名です

目次

巻頭言

オオサンショウウオの調査研究35年	理事長	栃本 武良	2
河川関係災害復旧工事に伴うオオサンショウウオの保護・保全対策について	副理事長	大沼 弘一	3
黒川地域を誇りうる水源の郷に	理事	瀧本 稔	4
あんこうのグッズづくり	理事	斉藤 敬子	5
いろいろな人に知ってもらおう	理事	柿木 俊輔	6
黒川地区からはじまる環境学習	理事	中島 悟	6
あんこう 創刊号によせて	研究員	笹田 直樹	7
あんこうは昔も今も地域の宝物	事務局長	奥藤 修	8
NPO法人 日本ハンザキ研究所への入会の思い	事務局員	木原 真一	9
自然とのふれあいに思う	事務局員	藤原 進	10
“あんこう”とそれぞれの思い	事務局員	竹村 雅敏	10
日本ハンザキ研究所のイベント報告	事務局員	黒田 哲郎	11
「あんこう」創刊にあたり	理事(編集長)	竹村 真澄	12

編集後記

巻 頭 言

平成17年8月に旧・生野町立黒川小学校と教員宿舎を借用して、日本ハンザキ研究所を設立した。それから3年の歳月が過ぎていった。この間には随分と色々な出来事があり、勝手な思いをハンザキ研究所ニュースにも書き続けてきた。ニュース第1号に「あさごエコ・ミュージアム構想」(案)として15の設備・施設を世間に問うべく提案したが、多くの実現を見るに至っている。残されていた施設やすばらしい自然環境を見ている内に湧き上がってきた夢のような(案)であったのだが、幸運もあって周辺の皆様方の理解や協力も得て実現できたものである。

このような状況は、初めの私の思いをはるかに上回るほどの整備状況といえるだろう。個人としての思いはただただオオサンショウウオの調査を体の動く内にやっておきたいというだけのことであったのだ。しかし、ハンザキの生態の解明や保護対策に関しては人間一人の持ち時間では対処できないことは分かりきっていることであり、若い研究者の出現とバトンタッチが必要なのである。そのためには折角の施設と環境があるのだから、これを何とか存続させることを考えるべきであると思った。ましてや、私の人生はロスタイムに突入している状況であり、組織を固め50年百年というハンザキのライフサイクルに対抗できる施設にしなければならぬと考えたのです。

ちょうど、私の周辺でバックアップして下さっているメンバーからも、組織化すなわちNPO法人にして継続できる体制にしたらどうかという提案があった。組織というのはなかなか面倒なものであるが、一個人の存在だけではやりきれない部分があるので組織化に踏み切ることにしました。

準備事務局を組織し、4月19日には設立総会を開催、5月28日には兵庫県に認証の申請をし、8月20日に法務局への登記も済ませることができました。現在までのところ190会員と思わぬ多くの方々からの支援を受けて法人としての活動を始めています。会員の皆様方には大変な感謝をいたしており、今後も長く支援をお願いしたいと思っています。支援は金銭的な面が大きなことは事実ですが、各種のイベントへの積極的な参加や周辺の方々への口コミの勧誘も重要です。宣伝費もままならぬ状況ですので、まずは、とりあえずハンザキ研へおいでください。フリーの飛び込みの見学の方もありますし、市内の施設からの紹介でいらっしゃる方もあります。お互いに紹介しあいながら地域の活性化に少しでも貢献できるようにしていきたいとも思います。

NPO法人の会員の皆様方へのニュースレターと共に、年2回の会誌「あんこう」を創刊しここにお届けいたします。ハンザキ研ニュースの方は、当分の間は私の勝手な書き散らし文でいきたいと思いますが、会誌のほうは事務局のメンバーにまかせて法人としての活動などの報告に代えていきたいと思っています。

NPO 法人 日本ハンザキ研究所

理事長 栃本 武良



オオサンショウウオの調査研究 35年

理事長 栃本 武良



写真 夜間調査中の栃本理事長

昭和40年に私は教師生活をやめて姫路市立水族館の設立準備室に着任しました。教師は大学を出てから2年間だけであったのですが、生物の好きな男子の中学生と高校生との遊びまわった時間でもありました。上野動物園の両棲類・爬虫類の飼育係の話があったのもその頃のことだったが、当時の私は魚類の飼育に熱中していてカメやカエルには関心が無かったのです。そこへ姫路に水族館ができるという話が飛び込んできたのである。教師も面白くて続けてみたい気持ちもあったが水族館の飼育係の魅力が勝った。建設中の水族館では魚類の収集の手段や時期による入手可能な生物の聞き込み調査や解説資料の作成など多忙な1年を過ごし、翌年昭和41年に開館しました。

ところが初代の館長はウミガメが専門で、以後20数年間はカメ水族館として存在感を示していくこととなった。淡水系統の飼育係として私は真水に生息するカメ類（イシガメ・クサガメ・スッポン）の飼育や生態調査をやることとなり、後には外来種であるアカミミガメの調査までする羽目になった。無論のことではあるが館長のウミガメの産卵生態調査でもフィールドの楽しさを十分に味わうことができた。開館して10年目にはオオサンショウウオの調査をすることとなったのであるが、これでは両棲・爬虫類の飼育係になっても良かったのではないかと見えるかもしれません。しかし、生態調査は地の利があると長続きするのです。子供時代にサカナ取りで縄張りになっていた多摩川水系の用水路などではカメはほとんど見かけることがありませんでしたし、オオサンショウウオは岐阜以西ですから上野の動物園では地の利がありません。姫路に来てため池の沢山のクサガメを見て感激しましたし、揖保川の主にイシガメ取りを教えてもらったりしました。そして、オオサンショウウオは中国山地が主生息地なのです。

水槽の大きなオオサンショウウオを見て何歳ですか？とか何年生きるのですか？といった基本的な質問を子供たちから受けても答えることができなかつたのです。残念ながら現在もまだ答えることができず、相変わらず「分かりません」と答えており、地方の博物館施設としての責務を果たすべく調査を始めたのです。聞き込みや文献による予備調査でも、オオサンショウウオの生態はあまり分かりませんでした。サワガニが好物だとか冬眠する、生命力が強く再生能力があつて欠けた指は再生するなどの散発的な情報はありました。しかし、数十年の調査を経てこれらの知見は誤りであることが分かってきました。例えばサワガニは単に捕食しやすい生き物であり、オオサンショウウオはひたすら待ち伏せをしつつ、鼻先に来たものなら何でも大口を開いて一瞬のうちに丸呑みにしますので、仲間もネズミもヘビさえも食べているのです。何でも食わないとあの巨体を維持することはできないのでしょう。好き嫌いなど言っている状況ではないのです。

冬眠の方は、同じ両棲類であるカエルの印象が強いことや、冬の谷川に入るヒトはほとんど無く冬には姿を見ないための誤解だったのでしょう。水温が何度cになったら冬眠に入るのかと厳冬期まで調査を続けていくと、結局一年中活動していることが分かってきました。指の再生についても、いかにもこれから伸びてきそうな突起が出ている写真付で書かれた文献も有りますが個体識別をして数年から十数年の追跡調査の結果からは、それ以上の伸びは見られない個体がほとんどです。再捕できていない、つまり追跡できていない個体についての結果が不明なので『ほとんど』という表現をしましたが、多分再生しないだろうと考えています。ただし、飼育下では再生しましたが条件が異なると思います。

このようなオオサンショウウオの30数年に及ぶ調査から解明できた生態の一部を、ポツポツと書いてみたいと思います。昭和50年に調査を始めましたが、調査方法や道具についてもまったくの手探り状態で、調査を重ねるたびに工夫や改善を試みつつやってきました。野外調査ですし、夜行性の動物ですからその行動にあわせた調査をしなくてはなりません。夜の川を数キロ廻りつつの調査はなかなかハードなものですが、30台半ばの体には一向に苦になりませんでした。それよりも、普段はうかがい知ることでもできなかった河川や周辺の生き物たちの生の生き様に触れることができ楽しくてならなかつたのです。

調査を始めるに当たって県下全域の市町へアンケート調査を実施しました。できるだけ近場で多数の棲息が見られるフィールドを見

つけるためですが、その中から生野町の栃原と魚ヶ滝が候補に残りました。

現地の視察は欠かせませんので、聞き込みと目視調査をすることになりました。栃原の川は市川の支流でオオサンショウウオは多産するという情報があったのですが、ハンザキ取りの名人がいて堂々と食用にしていると宣言されて閉口しました。天然記念物であることは承知しているが、国は何も保護の手段を取っていないし、自分たち一族は先祖代々神様のお恵みとして必要なときに必要なだけ漁獲して食うのだという方が出てきたのです。そして、必要なくらいでも捕まえてきてやるよと言われました。食われては調査になりませんので、候補から外しました。乱獲はしないで生活に必要なだけ賢く使うと言う姿勢には現在の“ワイズユース”の精神が昔から続いていることを感じさせられたのですが、現在では昭和27年に特別天然記念物に指定されており、調査するについても文化財保護法の下で国の許可を受けて手を付けねばなりません。

一方の市川本流の魚ヶ滝では、河原に下りた途端に対岸の岩の下から丸い物体が出ていたのです。夜行性と聞いていたのでまさかと思いつつ双眼鏡で見るとオオサンショウウオの頭だったのです。道路からのアプローチも良く河原の中洲には別荘があって、その上流側に石垣の土手が築かれていたので、そこにテントを張って調査基地にすることにしました。水面からは1メートルほどの高さがあった安心な場所として決めたのですが、大きな失敗を後に体験することとなったのです。上流のダムからの放水でした。パトロールの人から大して水位は上がらないよと言われたのですが、石垣の上スレスレまで水はやって来たのです。半日間中洲に閉じ込められ怖い思いをしましたが、ここでも貴重な知見を得ることができたのでした。それは、川に設置しておいた網生簀が流されて一匹のオオサンショウウオが絡まったまま水底で半日を生きていたのです。本種の皮膚呼吸のすごさを知ったのです。このようなフィールドからのお話をしばらく連載いたします。(続く)



河川関係災害復旧工事に伴うオオサンショウウオの保護・保全対策について

副理事長 大沼 弘一

2005年、円山川水系出石川の大規模な河川関係災害復旧工事に伴って、オオサンショウウオ等の保護・保全対策が行われた事はマスコミ報道等により、多くの方の知るところ

と思いますが、同時期、朝来市においても小規模ではあるが幾つかの河川関係災害復旧工事があり、出石川とは少し違ったオオサンショウウオ保護・保全対策を行っていました。朝来市での保護対策は、当時の姫路市立水族館栃本武良館長(現当研究所理事長)と協議し、(社)兵庫県自然保護協会主導で、県土木、生野町産業建設課、施工業者、朝来市教育委員会、漁業組合等と連携できた事もあり、比較的良い結果が得られたと思います。同保護対策は災害復旧工事に伴うものであり、その重要性から対策の為に工事を遅らせないよう工事状況に合わせての対策を行い、工事はすべて護岸の部分的な復旧である為、生息確認個体の施設での一時保護飼育等は行わず、河川内での緊急避難としました。これは工事箇所に生息する個体を工事着手前に調査・捕獲し、工事区間で工事による影響を受けにくい箇所へ放流するもので、関係機関の連携が不可欠である対策です。三重県では15年程前から行われている方法ですが、今回は詳細情報を得る為、工事期間中及び工事完了後のモニタリングは工事箇所外を含め長期間行っています。



写真 オオサンショウウオ等に配慮した工事

市川水系栃原川の例では、延長約2km区間で計10箇所の復旧工事箇所があり、確認個体計130頭について、緊急避難個体及び現状放置個体共に工事期間中の追跡を行いました。緊急避難先は河川の状況から避難元より個体が自力で移動しうると考えられる範囲で、工事中は避難元に戻りにくく、かつ他個体の生息が見られる所です。(本種は通常排他的行動を伴うナワバリを形成していない事及び生息の見られない範囲は物理的に生息に適さない可能性がある為)また、緊急避難を行った個体は事後元には戻さなかったが、工事完了後のモニタリング調査では半数以上が元の生息場所付近へ戻っています。また、当才幼生の確認状況から全工事区間の少なくとも2箇所に産卵巣穴があったと推定されたが、繁殖は工事完了の2年後に再び見られるようになった。(河川関係災害復旧工事に伴うオオサンショウウオ保護の試み (社)兵庫県自然保護協会)

円山川水系建屋川や出石川の様で大規模な災害復旧工事の場合、保護個体は施設にて一

時保護が必要になると思われるが、毎年数多く行われる小規模の災害復旧工事では、工事期間も短く、河川内での緊急避難で十分対応可能であると思えます。しかし、対応するにはそれぞれの河川の特長や本種の生態、生息状況等を考慮しなければならず、その都度状況に応じ緊急避難先の設定等の対応策を考えなければならない。これも対策後に一定量のモニタリング調査がなされなければ、うまく機能したかどうかの評価はできないが、単なる物真似ではより良い結果は望めないと思われる。この為マニュアル化は非常に難しく、対応出来る人材育成が必要となるでしょう。

オオサンショウウオは未だ詳細は不明であるが、比較的寿命の長い動物であり、現在繁殖ができない環境にあっても、成体の生息する環境があれば、流動的である河川環境では、数年又は数十年先には確実に繁殖地は形成されると考えられます。(社) 兵庫県自然保護協会による 1991 年より調査継続中の武庫川水系羽東川支流後川奥川の例では、道路拡幅、取水堰の改修等の影響で事後は隠れ場所すらない状況でしたが、毎年繁殖期に複数個体が本流より遡上して来ては下っていた。その後 5 年経ち護岸の下に空隙ができ、毎年同じ個体が繁殖期に入り込むようになったがまだ繁殖には至らない。さらに 10 年経ち空隙も広くなった為か、ようやく産卵が行われた。人工構造物下の空隙である為、近いうちに復旧工事が行われるかも知れないが・・・。

オオサンショウウオは兵庫県でも多くの地域において、まだ身近な野生生物といえますが、その保護・保全対策については残念ながら十分行われているとはいえない状況で、毎年県内の何処かの河川で災害復旧工事等が行われています。また、生息地の部分的な箇所でのみの調査では季節的な移動を伴う全体的な生息状況はわからない。私たちの調査では、繁殖期に 5 km を越える移動を行う個体を確認しています。現状では様々な面で難しいかも知れませんが、オオサンショウウオ生息地の保護・保全には生息する河川全体を見越した対策が望まれます。



黒川地区を誇りうる水源の里に

理事 瀧本 稔

①「限界集落」は国土の崩壊をまねく

過疎・高齢化が急速に進み、コミュニティの維持が困難な状況に直面している地域が全国にはたくさん存在しています。集落の高齢化率 (75 歳以上) が 50% を超えた地域は、

いわゆる「限界集落」と呼ばれます。全国で 7873 地区も出現しており、長野県等では県庁所在地の中ですら見受けられるようになっています。これら「限界集落」では、伝統芸能・文化が喪失している、日本の山村の原風景そのものが失われている、という状態になっています。



写真 廃校となった黒川小学校

これらの地域は、おおむね河川の上流に位置しているため、水源の里と呼ぶことがふさわしいと昨年 10 月 18 日の全国水源の里シンポジウム (京都府綾部市で開催) で提起されました。800 人が参加して開催されたこのシンポジウムでは、水源の里を守ることこそ、日本の国土を守り国民の生活を守るようになることが改めて確認されました。そして、11 月 30 日には全国水源の里連絡協議会が設立され、朝来市も参加しました。

今後の対策として、川の流域社会の創造が大切で、山・川・海は一つの流れで結ばれています。上流域は下流域の人々のものでもあり、下流域は上流域に感謝することが大切だと思います。その上で、環境保全寄与率 (山の面積) に応じて交付税を出すという森林環境対策交付税を創設する、という提案もあります。

水源の里は何もせずに手をこまねいているだけでは消滅の危機に陥るので、定住対策の推進、農林業など地域の資源を活かした産業の創出、情報・通信の基盤整備、有害鳥獣対策など水源の里の課題を、住民、自治体、都道府県・国が、それぞれの役割の中で連携して取り組む必要があります。

②黒川の現状と行政の支援

朝来市内には 161 の行政区があり、65 歳以上の高齢化率は 28% です。50% を超える地区が 10 箇所もあり、準「限界集落」といえます。黒川地区の 65 歳以上の高齢化率は 62.03% ですから、何もしないと「限界集落」となります。なんとか、誇りうる水源の里にしたいものです。

今年の朝来市議会 3 月定例会で井上英俊市長は、平成 20 年度市政運営方針 一 自考・

自行、共助・共創のまちづくりを提案されました。その中で、「地域の歴史文化遺産を保存・活用し、継承する」とする項において、「市内に多く生息する国特定天然記念物であるオオサンショウウオの保護に努め、本年黒川地区で開催される全国大会『オオサンショウウオの会・朝来大会』を支援します。」と明らかにされました。

また、本会議の中で私の質問に井上市長は「黒川地区を限界集落活性化のモデル地区にしたい」と答弁されました。

具体的予算として

「限界集落活性化プログラム」

○廃校舎利活用事業

30 万円 (活用イベント実施)

○アコバスを利用した地域活性化事業

11 万円 (町内観光施設の割引券作成、イベント開催)

○源流域資源活用と特産品開発事業

18 万 5 千円 (オオサンショウウオ等 PR 事業、特産品開発アドバイザー招聘)

が計上され可決されました。

③黒川を環境学習の場として活用

黒川地区は雑踏に踏み荒らされない大自然の中に位置し、環境学習には絶好の場所となります。

今年 5 月に実施された恒例の自然学校では生野小学校と奥銀谷小学校の 5 年生の児童 38 名がいつもよりも足を伸ばし、ハンザキ研究所を訪れてオオサンショウウオを目の当たりにして自然の大切さを学びました。また、生野小学校と奥銀谷小学校の統合に向けた児童の交流事業においても、今年の 10 月にハンザキ研究所見学会が予定されています。

現代の子どもたちは、テレビ・パソコン・ゲーム機等に囲まれた生活をしており、地方の子どもですら自然体験が少ない状況です。大自然の中につつまれて、自然の恵み、自然の力を知り、自然と調和して暮らす本来の人の生き方を取り戻すためにも、黒川地区の果たす役割は無限の可能性を秘めています。

④情報発信により全国との交流

今年の兵庫県 P T A 協議会中央大会は、11 月 23 日に朝来市の和田山ジュピターホールで開催される予定ですが、この大会でハンザキ研究所ニュース等を配布して PR することになっています。県内の各 P T A 組織が、ハンザキ研究所を環境学習の場として活用する取り組みに繋がることが期待されます。

ハンザキ研究所が全国に情報発信することにより、多くの人々との交流が促進されることを期待します。エコ・グリーンツーリズムの展開、森林の活性化・里山保全のネットワーク化、田舎暮らしの提供等の研究が必要です。地元の頑張りを支える外部からのサポー

トが必要であり、そして交流人口を増やしていくことによって、人・カネ・モノ・情報を受け入れ、黒川をワクワクと胸躍る水源の里にしたいものです。



あんこうのグッズづくり

理事 (いくの銀谷工房代表) 斉藤敬子

あんこうとの出会い? いまから何年前になるでしょうか。

町並みをつくる会にいつもこられている神戸の中井さんが「斉藤さん、オオサンショウウオのなんかできへんか、おもしろいと思うよ」と言葉をかけられたのが始まりだったように記憶しています。さあそれからが悪戦苦闘、オオサンショウウオを見たこともなければ、『あんこう』とよばれていたことも、何も知りませんでした。

さて、コースターをつくってみようと挑戦したものどこから?何を?の連続。

足と手に苦勞し、なんとか形になり、黒川の秋の陣のイベントに始めてもって行き、「これなんですか?」、「サンショウウオよ」、「へえ、かわいいなあ」とお客様との会話を楽しみました。すると、後ろから、「サンショウウオは手が 4 本指で、足は 5 本指ですよ」とサンショウウオの研究してるんですといわれる女性が声をかけてくださいました。

そのかたが、私たちの第一号のお客様でした。今から思えばなんと拙い作品だったでしょう。そして、初めてのあんこうとの対面、「まあなんとグロテスク」、でもかわいい目に大きな口。私たちはオオサンショウウオが生野ではあんこうとよばれ、親しまれていることを知りました。そこからが、いくの銀谷工房のあんこうグッズづくりの出発点でした。

栃本先生はもちろん、いろいろな方からアイデアをいただき、「もっとこうしたら」の助言をいただきながら、現在、いくの銀谷工房が手がけているグッズは 15~16 種類となりました。



写真 人気の高いあんこうグッズ類 (デジカメ入れ、携帯ストラップ、小銭入れ他)

生野に住みながらオオサンショウウオのことも何も知らなかった私たちですが、今では、こられるお客様にオオサンショウウオのことをちょっぴり話せるようになっていました。グッズをつくり、見てもらったり買ってもらったりすることにより、より多くの人に生野のあんこうを知ってもらえるのではと思っています。

きれいな水・きれいな空気・まだまだ自然がいっぱいの生野、こんな生野に住んでよかったと思う「生野大好き」な銀谷工房のメンバーです。

いろんな人に知ってもらう

理事 柿木 俊輔

オオサンショウウオの調査中に会った方が声をかけてくることがあります。調査道具一式を持って川の中を歩いているワケですから、不審がられても仕方ありません。当然、調査の目的などを説明するのですが、これがまた、なかなか理解して貰えないことがあるのです。ある県で調査をしていたとき、オオサンショウウオを養殖して全国の河川に放流して回る活動をしているのだと思いこんでいる方がいました。また別の県の方は、日本一大きなオオサンショウウオを探して全国を回っている賞金稼ぎだと誤解して、会う度に「どこぞの淵ででかいやつを見たぞ」と親切に教えてくれたりしました。巨大なオオサンショウウオを見つけても誰も賞金なんてくれません。一度思いこんだらなかなか修正がきかないらしく、私もお礼を言って現場に見に行くだけにしていました。

また、「オオサンショウウオはアユを喰って困るから、どこかへ持ってってくれ。」そのように言われることがありました。内緒でオオサンショウウオを殺している人もいました。そのような人にオオサンショウウオが大食漢ではないこと、エサ取りが上手ではないこと、アユばかり食べるわけではないことを幾ら説明してもなかなか聞いてもらえません。「お前はオオサンショウウオが好きだからそんな風に言ってるんだろう、俺はだまされないぞ!」、といった感じです。「釣りに目が眩んでワケが判らなくなってるのはアンタだろう!」という言葉を飲み込みながら悔しい思いをしたものです。ただ、そのような人とケンカをしても仕方がないですし、少しずつ判って貰えるように努力しなければいけないと思います。確かに、知らない人から見ればオオサンショウウオの研究者・調査員などモノズキのマニアック野郎にしか見えないだろうと思います。

最初から話し合いの場に持ち込めない場合すらあります。幸い、当研究所のある地域はオオサンショウウオに理解のある場所です。研究所の整備も徐々に進みつつあり、様々な活動が始まっています。

オオサンショウウオの未知なる部分を解明し、多くの人たちにこの不思議な生き物のことを知って貰う活動をしていきたいと思っています。

黒川地区からはじまる環境学習

理事 中島 悟

谷あいヤマセミのつがいが鳴き交わしながら遡っていき、みなもにはミズホウズキの黄色い可憐な花が頭を垂れる。幾つもの白い筋となる流れにはアマゴが踊り、河床の石の上でイシガメが午睡中。廃校となった小学校の小さな池の周りには泡雪のようなモリアオガエルの白い卵塊が幾つも並んでいる。

蝉時雨が聞こえ始めた夏の初めに黒川の地を訪れると、今も残る里山の原風景が飛び込んできます。麦わら帽子にランニング、短パンの川ガキどもが、大声をあげながら夢中で魚とりをし、その様子を大きな岩陰から1mは超えるオオサンショウウオが様子をうかがう情景が脳裏に浮かびます。

ここ黒川の地は、自然豊かな里山を舞台にハンザキ研究所を基地とし、体感の学習を通して自然の素晴らしさを共に享受し再発見できる場であると思います。自然環境の理解を深めるには本やメディアからの知識・情報も大切ですが、体感し、自然の素晴らしさ、大切さ、驚異など様々な感性を磨き、今直面している地球環境問題の自己啓発の機会にして欲しいと思います。就学前から高齢者までのすべての世代における環境学習の場であり、自然への畏怖、生命の尊さ、環境マナー、もったいない、エコライフの実践など様々な環境問題を啓発し、各個人が環境問題の発信者となることが重要です。



写真 オオサンショウウオ夜間観察

黒川地区は多々良木ダムと黒川ダムという大きなダムを2つ持ち、主に前者は水力発電用として、後者は上水・工業用水として使われています。環境問題の中でも常に主要問題となる「水」を扱うダムがこの地にあるというのは、これから川と森をテーマとした環境学習を始めようとする私たちにとって何かの縁でしょうか。水の性質やはたらき、社会や自然と水との関わりや、水質汚濁や水辺環境の悪化による自然環境への影響などについて習得し理解することにより、水の大切さ、水を貯める森の重要性を発信できる場であると考えています。

黒川の川と森を題材に、子どもから大人までが参加し自然環境の素晴らしさを体感してもらうことが環境学習・教育の主要テーマです。

そして、体感し感性を揺さぶり起こすことにより、環境への価値観や、環境の改善や問題解決などの基礎的な知識・技能を獲得し、次のステップに積極的に参加する動機付けとなることが願いです。



あんこう 創刊号によせて

研究員 笹田 直樹

子供の頃、恐竜図鑑で見たエリオプスの様な生き物が、この小さな日本に、しかも山間の溪流に住んでいるという。井伏鱒二の「山椒魚」を学校の教科書で読んだ時に感じた薄気味の悪いような、でもワクワクするような何とも言えない気分で、先輩に連れられて行った保護池には、約200個体のオオサンショウウオ（ハンザキ）が蠢いていた。それが、オオサンショウウオとの付き合いの始まりであり、ハンザキ研究所の栃本所長（当時は姫路市立水族館）との出会いの場だった。

以来、10数年間、各地での分布・生態調査、保全対策の検討に関わり、河川や里山環境の急激な変化を実感しながらオオサンショウウオと接してきた。また、その保全を通じて、調査・研究に取り組まれている学識経験者や関係者、NPOの方々との有意義な会話の場を持つことが出来、今の自分の財産になっている。本紙の創刊にあたって、少しだけ紙面をお借りして、新ためてオオサンショウウオの保全・研究の必要性の認識向上とハンザキ研究所の発展を微力ながら後押しさせて頂きたい。

オオサンショウウオが、文化財保護法により国の「特別天然記念物」に指定されていることは有名だが、特別天然記念物＝国宝であることは、意外と知られていない。「どこにで

も棲んでいるのに」と言うのが一般的な意見だ。ちなみに、国宝には、姫路城連立天守、二条城二の丸御殿、今昔物語集等々、絢爛たる文化財が含まれている。これら世界的にも誇れる文化財と、同等の価値がオオサンショウウオに対して法律で認められている。シーラカンスやカブトガニと同様に「生きた化石」とも呼ばれ、諸説あるが約3,000万年前から、ほぼ現在のような姿を保っているという学術的な希少性（価値）が、国宝としての本来の理由である。ところが、最近になって「生きた化石」に、「絶滅危惧Ⅱ類（環境省レッドリスト2006）」という肩書きが与えられた。「どこにでも棲んでいる」はずのオオサンショウウオの個体群の減少、その生息条件の悪化、交雑可能なチュウゴクオオサンショウウオの侵入等が原因のようだ。

そうした中、西日本で最も調査データが豊富な市川水系の河岸に「日本ハンザキ研究所」が設立され、先日、NPO法人としての申請が受理された。所長の栃本氏が、これまで地道に取り組まれてきた研究活動を継続・継承する準備が整ったことになる。飼育下では、少なくとも51年間生存するという記録があるが、幸運な個体は、恐らくそれ以上の寿命を持っている。そんな生き物が相手となると、簡単には詳細な生態を把握することは難しい。研究者が数世代かけて、バトンを渡しながらの研究になるというのが栃本所長の意見だ。

「国宝」と同等な価値を認められた生物とは言え、その生態には未だ解明されていない部分が多く、必ずしも十分な対策が施されるとは限らない。また、過去からの人との係り、文化的な価値についても再認識する必要がある。各地の研究者や活動家により、徐々に解明されてきた生態的、生理的、遺伝的な成果を活用しながら、溪流や里山環境を代表する研究分野として、あるいは地域文化の核として、地道に、でも着実に発展することを願いつつ、機関紙の創刊号によせる言葉とします。



写真 賀茂川産のチュウゴクオオサンショウウオを運んで来た、京都大学松井教授(左)と語る理事長

あんこうは昔も今も地域の宝物

事務局長 奥藤 修

国の特別天然記念物オオサンショウウオ、これが、私の住む市川源流の黒川地域には大変多くいるようだ。これを、黒川地域ではあんこうと呼び古くから食する習慣があったようで、子供のころには夜の川にあんこう狩りについていった記憶がある。又、あんこうを干して乾燥させた皮が入った味噌汁を体に良いと母親に無理やり食わされた経験もある。

なんでもあんこうの皮を食べると産後の肥立ちに大変良い効果があるそうだ。何で子供の俺が食わされたかは定かでないが「ひ弱な体質」であったのかも知れない！

では、あんこうが国の特別天然記念物に指定され保護されるまでに、この地域の人たちがどの位の数を年間に食していたかを地元のあんこう好きの人に聞いたところ、食べる習慣のある人は、年間「20匹くらいは」との返事が返ってきた。それで、その味はどうかと聞くと、淡白で鶏肉のような食感で甘みがあり刺身で食べるのが良いそうだ。地元であんこうを活かす話になると、食べさす話が先に話題に上がるが、今回はこれをシンボルとして扱ひ活性を図る計画の話である。

二年前の晩秋に、日本ハンザキ研究所と支援団体のNPO法人地域再生研究センターから黒川区の活性化にオオサンショウウオを活用した事業を展開しないかとの呼びかけに呼応して、当時の黒川区の役員11名の話し合いの中、高齢化を向かえ、少数人口集落の消滅も身近に迫る状況化であり、6地区全体で力を合わせて集落維持の対策を検討していく良い機会であると捉えて、半年間の準備期間に協議を重ね、黒川地域活性化協議会が設立されたのです。

既に一年前から栃本武良氏（前姫路市立水族館館長）が旧黒川小中学校内にある教員宿舎を、日本ハンザキ研究所として活動を開始されております。そこで、協議会も氏のあんこう研究活動を活用し、市川の源流全域を屋根のない博物館として捉え、地域の豊かな自然環境、歴史、生活文化を保全、復元し、地域活性の手立てとして、IUターンを始めとした、二地域居住や多自然居住などの促進を図り地域の再生を促す計画を作成したのです。

拠点施設の博物館には、廃校の旧黒川小中学校の再利用を図ることが地域全体の協力を得る最良の方法であると考えました。この学校には地域の熱い思いがあります。明治5年に大明寺庫裏の寺子屋開設から始まり、明治34年～41年の間、大外地域に奥銀谷尋常小学校第一分教場・簾野地域に奥銀谷尋常小

学校第二分教場が開校し、42年に大外地域の第一分教場が黒川尋常小学校となり、簾野地域の第二分教場が奥銀谷小学校簾野分教場となります。又、新生中学、生野中学校黒川分校がこの地に建設された後、昭和25年には黒川小学校と奥銀谷小学校簾野分校が統合し黒川小学校と成り、現在の地で黒川小中学校として共に終焉を迎えたのです。



写真 2007年秋 世代を超えた同窓会

各集落が分散していて、それぞれ、独自の自治運営をしてきた地域状況にあつて、学校統合により、合同運動会や学芸会などに住民が参加することで、学校教育を通じて連帯感が培われ地域の協力体制が確立されてきたのです。この様な経緯の中、この地は、地元の住人にとって、もっとも身近で感慨深い記念すべきシンボリックな土地なのです。

しかし、現在の地域の状況は、この事業を推進するには大変厳しい条件下にあります。高齢化と共に核となる地域の絶対的なマンパワーの不足と、地域間の条件格差などが時代と共に広がった事で事業運営に問題を残しているのです。

このような現状の中で、日本ハンザキ研究所は事業の全体的な支援や、また、センター施設の運営母体として、本事業の重要な役割を担う事となります。

日本ハンザキ研究所は、国の特別天然記念物であるオオサンショウウオの永続的な研究と、オオサンショウウオの棲める河川の保全、又、それを守る後背地の自然環境や地域文化の保全を行う事で、社会全般の良好な環境保全活動に繋がるものとして活動を展開しています。おかげをもちまして、特定非営利活動法人としての会員総数も現在180名を超える状況下にあります。そしてその中には、地元黒川地域や、生野町内の今後を担う世代が多数事務局員として参加して積極的な活動を行っております。

現在は「あんこうミュージアム」の完成を目指して、孤軍奮闘の栃本理事長を先頭に、環境学習を中心とした活動を地道に手作りで行っています。この活動がきっと市川源流域の自然と地域文化を保全・再生しうる事業で

あり、源流の里のモデルとなるべき活動であると信じて・・・。

(学校の履歴については、黒川小学校閉校誌「くろがわ」より引用)



NPO 法人 日本ハンザキ研究所への入会の思い

事務局 木原 真一

このたび生野町黒川に活動拠点を置く日本ハンザキ研究所がNPO法人化され、その活動がより大きく広がっていくことになり嬉しい限りです。

私が黒川地域と出会ったのは今から34年前の昭和49年のことですが、Uターンで生野町役場に勤務し、町道舗装工事の担当で黒川の地を訪れて感動したことが強く思い出されます。

確か黒川の長野・梅ヶ畑地区も圃場整備はされてなく、道路沿いの河川も自然の石積み護岸や土手が多くて道から簡単に川に降りられ、きれいなせせらぎにひとときの安らぎを覚えた記憶があります。

道沿いの谷川にはわさびが生えている沢もあり、初めて天然わさびの味を知ったのもこの時です。

8年近くを都会の空気に慣れていた私にとって、周りの山々の豊かな緑と透きとおった川の水、そして冷たい空気とうまさ自然のありがたさを改めて知らされたものです。

黒川地域と再び深く関わるようになったのは平成11年の夏、黒川地区活性化事業のひとつ「めっちゃおもしろい黒川大作戦」という都市と農村の交流事業で、1泊2日民宿・民泊のイベントを実施することになり再々黒川本村地区に通いだしたことからです。

関西電力黒川ダムのおもと、黒川自然公園センターをメイン会場にし、裏の川ではアマゴ釣りやあんこうウオッチング、草木染め体験、木工教室、林の中でハンモックを吊っての昼寝体験、ダム堰堤での大声競争、ダム周辺での山びこ体験等々、自然を生かしたいろんなメニューが用意され、そして夜には自然公園センター広場での野外大宴会(およそ、100人くらいの参加だったと記憶)地区の方が総出で準備や運営にあたられ、テーブルや椅子もみんな手作りで、但馬牛と黒川産の新鮮な野菜のバーベキューやアマゴの特製から揚げなど、どれも美味しくまた人情味あふれる宴会で夜遅くまで盛り上がったことを鮮明に思い出します。

黒川地区ではその後も毎年11月はじめに「めっちゃおもしろい黒川秋の陣」として、農

林産物や特産加工品の直売をはじめ、地区外のグループ・団体の応援のもと、餅つき、加工品の出店、アマゴ釣りなど、いろんなメニューを増やして都市と農村の交流促進活動を続けておられます。

しかし、黒川地域に限りませんが少子・高齢化のなかで、周辺の集落は人家が1軒また1軒と減り続け、周りの田畑は休耕田や荒れ田となり、そして手入れの行き届かない山林が増えている状況を見るにつけ、なんともいえない寂しさと不安を感じずにはおれませんでした。

そんな折の平成17年、旧黒川小中学校に日本ハンザキ研究所が設立され、オオサンショウウオ及びそれらを取り巻く自然環境の保全及び復元に関する調査・研究をはじめられました。

その調査・研究活動が子どもたちの環境学習や自然体験イベントなどにも活用され、市内をはじめ都会からの来訪者が増え、黒川地域の魅力を広く情報発信し、交流活動の展開にも大きく貢献されています。

また、平成19年には黒川地域活性化協議会、日本ハンザキ研究所などがNPO法人地域再生研究センターの支援のもとに黒川地域全体を地域まるごとミュージアムとして「源流の里 あんこうミュージアム」構想を立てられ、旧黒川小中学校跡地を中核施設として地域再生にむけた活動を展開されようとしています。

このようなときに、日本ハンザキ研究所がNPO法人化され、地域の環境保全活動や交流活動の拠点となる「あんこうミュージアムセンター」として、黒川をはじめ、広い範囲からの個人や団体からの支援をもとにして活動がさらに大きくなり、黒川地域の再生につながっていくものと思っています。

この私もこれまで地域といろんな形で関わってきた中で、これからの黒川地域が“限界集落”の再生モデルとなるように願い、微力ながらその一部でもお役に立てるならばと当法人の会員に参加した次第です。



写真 秋恒例の祭り「黒川秋の陣」

自然とのふれあいに思う

事務局 藤原 進

此の度、特定非営利活動法人「日本ハンザキ研究所」の会員として参加させて頂きました。

「ハンザキ」？なんだ？最初は聞きなれない言葉でどの様なものが判らず、余り気にも留めなかったのですが、それが「オオサンショウウオ」とのこと。生まれ育った河川には沢山住んでいました。又、夏には「蛍」の成虫を求めて夜中に黒川の河川に入ってみると、石だと思って踏んだのが「オオサンショウウオ」の背中だったりしたことがあり、まんざら縁が無い訳でないので、この会に入会した訳です。

私は十名余りの方達と、長年の夢を追っています。それは生野に「蛍」を甦らせる事です。昔といっても4～50年前のことですが、この生野の彼方此方で夏の夜には「蛍」が乱舞していました。珍しくない光景があったものです。それが今では黒川のあたりでしか観られません。

そこで、先ほどの十数名の方々と「生野に蛍の乱舞するところが見たい！」との思いから会を結成し活動を続けています。

最初は何も解らず、インターネットを見たり、何処其処で「蛍」の養殖をしてるよと聞くと、飛んで行って聞いたり夢中で活動をしていました。

知識がチョット付くと今度は自分達で養殖をしたい！との思いがふつつ湧きたち、養殖業者から幼虫を仕入育てること約8ヶ月。自然界に放して乱舞を期待したのですが、結果は数匹の乱舞？でしかなりませんでした。

次の年、今度は卵から「蛍」に！と大胆にも本格的な養殖に取り掛かりました。そこで目に付けたのが「黒川」です。夕方から黒川に集合し、いざ採取へと川に入って行きました。「メス」が1回に産卵する数は「ゲンジボタル」で約500匹。1匹に対して「オス」5～6匹が必要と知識としてありましたので、10000～15000匹が飛ぶと「乱舞！」との思いから、「メス」を20～30匹。「オス」を100～150匹捕獲すると計画通りになるものと思い必死で探したのですが、捕獲出来たのは「オス」ばかり。結局は「メス」10匹余りだったと思います。

捕獲した「メス」と「オス」を1：5の割合で産卵箱に入れ交尾待ち。待望の「卵」を産んでくれたのですが、私が持って帰って孵化させたのが「卵」と判らず、「ゴミ」ばかりが水の中にあると思い、廃棄処分！後から会員が孵化させたのを見て「ギョ！」。あの「ゴ

ミ」が動いている！結局、幼虫になったのが1000匹でした。その幼虫を4月ごろ小野地区の小川に放流し、乱舞を期待しつつ待つこと約3ヶ月。6月下旬から7月上旬まで見に行くたびに気持ちが落ちてゆくのがわかりました。飛んでくれたのは最大で10匹でした。

それから毎年、黒川にはお世話になり「蛍」の成虫を採取させて頂き、養殖をしていましたが、やっぱり乱舞には程遠く、自然界を手中に収めるなんて大それた考えだったことを思い知らされました。しかし、生野の方々から「乱舞期待してるよ」って声を聞く度、勇気ももらって今に至っていますが、23号の台風で何もかもが流れてしまい、今まで黒川で採取していましたが、それも出来なくなっております。

今年は黒川にも「蛍」の乱舞が復活したとのこと。来年あたりから再び採取させて頂けたらなと思っております。「オオサンショウウオ」の背中を踏みふみ、「蛍」のメスを追っかける大人が夏の夜に徘徊しますが、「オオサンショウウオ」殿、ごめんなさい！



写真 蛍の幼虫の放流

“あんこう”とそれぞれの思い

事務局 竹村 雅敏

あんこう（オオサンショウウオ）は相も変わらず、川底をゆっくりとあるいている。

村は知らぬ間に子供の声も響かなくなってしまった。

今、山間の里黒川に NPO 法人日本ハンザキ研究所が設立され新しい動きが始まった。

地域、人にはいろいろ意見がある。身の丈にあったちっちゃな活動でも自分たちが楽しめる事をしたい。地域丸ごと環境（あんこう）ミュージアムとして地域、地域外からの支援を含め人の交流を進めたい。来るお客さんに農産物を買ってもらいたい。もう歳だしゆっくりしたい・・・等々。

それぞれ求める先はかけ離れていたとして

も、どちらが正しいのか正しくないのか、良いのか悪いのかと言ってみても意味がない。

足踏みをしていても、批判をしていても前には進まない。行動すること。一步踏み出すこと。新しいものを受け入れること。考えを言葉にすること。

NPO 法人日本ハンザキ研究所は、オオサンショウウオなどを取り巻く自然環境の保全復元をモットーに社会教育、まちづくり、学術・文化・芸術の振興、環境保全、子供の健全育成等、地域を核とした活動を計画しており、それぞれの思いを胸に、思いの実現へ向けて人々が集い法人が設立された。

それぞれの思いをよそに“あんこう”はゆっくりと時を刻んでいる。



日本ハンザキ研究所のイベント報告

事務局 黒田 哲郎

旧黒川小中学校は、あんこうミュージアムの中核施設として、黒川地域全体の中心核としての役割を期待されています。

同校を拠点に活動する、NPO 法人としての当研究所はオオサンショウウオの研究を行うだけでなく、まちづくり活動の一端を担うものとして、広く市民に門戸を開放し、オオサンショウウオ及び黒川地域の魅力を伝える役割を果たすとともに、末永い発展へ寄与することを目的として研究所を公開し、更に積極的に多くの人を呼び込むイベントの開催を企画してゆきたいと考えています。

これらの事を踏まえながら、事務局において具体的に行うイベントの検討を重ねましたが、最終的に実施することになったのは下記の通りです。

5月－第1回新緑トレッキング

6月－モリアオガエル産卵観察会

7月、8月、9月－オオサンショウウオ観察会

8月－親子水辺環境学習会

10月－第2回紅葉トレッキング

11月－第3、4回紅葉トレッキング

9月の時点において、あとわずかのイベントを残すのみとなりましたが、ここまでの実施の状況についてお知らせしたいと思います。

① 第1回新緑トレッキング

(平成20年5月31日)

初めての事業として、試行錯誤をしながら準備を進めていましたが、残念ながら前日から雨天のため、中止となりました。

② モリアオガエル産卵観察会

(平成20年6月21日)

実質的な初めてのイベントでしたが、14名(うち親子は二家族6名)の参加者がありました。残念ながら当日は、産卵シーンをみる事が出来ませんでした。事前に柿木講師が徹夜でビデオ撮影した産卵シーンをみて、一同感動しました。当日は2~3匹が鳴き交わしを行っていました。

③ オオサンショウウオ観察会

・第1回(平成20年7月19日)

研究所内の講義室で簡単なレクチャーを行った後、当研究所で保護しているオオサンショウウオを観察してもらい、その後で野生のオオサンショウウオを観察するイベントです。夏休みの初日であり、夜間ということもあって、お客さんが集まるかどうか不安でしたが、この日、町内でキャンプをしている団体も来られて、何と41名もの参加者がありました。

・第2回(平成20年8月22日)

今回も前回同様のプログラムで開催しました。今回も36名の参加があり、大盛況でした。これまでの2回は夏休み期間中ということもあり、多くの子供の参加がありました。

・第3回(平成20年9月20日)

今年は人工巣穴での産卵が確認されず、期待していた卵塊の観察はできませんでした。しかし、今回の参加者は全員大人であり、加えて夏休みの半数程度の人数であったことから、これまでとは違い、落ち着いた雰囲気での観察会となりました。3回とも、自然のオオサンショウウオに出会うことができ、遭遇率は今のところ100%です。



写真 自然愛好家など大人ばかりの第3回オオサンショウウオ観察会

④ 親子水辺環境学習会

(平成 20 年 8 月 2 日)

初夏の盛り、暑い日中の開催でしたが 20 名の参加がありました。水に浸かりながら一生懸命生き物を探し、約 20 種類の生き物を発見しました。子供よりも熱心に生き物を追いかける親御さんもおられ、親子共々楽しんでいただけたことと思います。

その他、共催や後援の事業として、「黒川キッズラボ 2008」、「オオサンショウウオの会 in 朝来(あさご)」があります。

⑤ 黒川キッズラボ 2008

(平成 20 年 8 月 20 日～24 日)

昨年に引き続き、当地においてキッズラボが開催されました。これは小学校 4 年生～6 年生を対象とした、夏休み自由研究プログラムです。オオサンショウウオや植物、魚、昆虫について調べるなど、黒川ならではのテーマで自由研究を行い、それ以外にも川遊びやソバ打ち体験、魚釣りなどを楽しみました。



写真 自由研究の成果を披露

⑥ オオサンショウウオの会 in 朝来(あさご)(平成 20 年 10 月 4 日～5 日)

今年の 10 月、日本ハンザキ研究所のある朝来市生野町において、オオサンショウウオの会が催されます。今回は初日(10/4)の午前に一般市民向けの記念講演、シンポジウムを開催し、午後からは研究者による報告会が行われます。また、夜には懇親会及び夜間観察会が行われます。二日目(10/5)の午前は当研究所及びその周辺と、河川工事現場の見学を行い、昼食後に解散となります。午後は希望者のみ出石川の河川工事現場やコウノトリの郷公園を見学します。

今後も知恵を絞り、各方面に協力を仰ぎながら、オオサンショウウオについて学び、ま

たそれを育む源流の里である黒川の自然に親しむことが出来る楽しいイベントを企画してゆきたいと考えています。そして、この紙面で計画中のイベント、終了したイベントなどについて紹介していきたいと思っています。



「あんこう」創刊にあたり

理事・編集長 竹村 真澄

黒川地域の活性化をめざして「黒川あそび会」や「黒川地域活性化協議会」などの活動をしていますが、新たに NPO 法人「日本ハンザキ研究所」の理事として参加し、事務局として係ることになりました。

今回は会誌『あんこう』の編集長としての大役をいただきましたが、実質上の仕事は何も出来ませんので、そちらは影の編集長にお任せしてデザイン面でお役に立てればとお受けしました。

数年前より、黒川も限界集落と呼ばれるようになり、地域の将来に不安を抱かざるをえない現状の中、「今のうちに何とかしなければ」とのあせりはありましたが、具体的にはどうすればいいのかわからずにおりました。

そんな折、NPO 法人地域再生研究センターの力を借りて、黒川地域の再生をテーマに「黒川地域活性化協議会」を立ち上げての取り組みが始まりました。

また同時期に、前姫路市立水族館館長の栃本先生が、三十数年間通われたこの黒川の地に留まり、オオサンショウウオ(当地の呼び名は「あんこう」)の調査研究を続けていかれることになりました。

黒川の魅力ある自然環境を守りながら、そのシンボルとしてのあんこうを核とする『黒川あんこうミュージアム』構想が形となって見えてきたのです。

栃本先生の長年の研究の成果である膨大な資料や図書の数々はミュージアムとして不可欠な宝だと思います。

高齢化で常に人手不足に悩まされてきた黒川の活性化の動きに、専門的な知識を持った方々の協力や、黒川を大切に思ってくくださる人々が集まり、旧黒川小中学校を活かした取り組みの土台作りが出来上がったのです。

コウノトリと共に国の特別天然記念物であるオオサンショウウオがこの南但馬には多く生息していますが、決して恵まれた環境条件ではなく、その背景としての山林の荒廃等が問題となっています。

オオサンショウウオなどとそれらを取り巻く自然環境の保全及び復元を目指して、さらには環境学習や交流施設として、4 月 19 日に

設立総会を開催し、8月末に正式に「NPO 法人 日本ハンザキ研究所」として立ち上がりました。

河川工事中のオオサンショウウオの保護施設としてプールも改修され、日中でもその姿を間近に見ることが出来るようになり、小学校の自然学習や、多方面の団体からの見学も申し込まれるなど、オオサンショウウオへの関心も高まってきたように感じられます。子供達への勉強会を開く中でも、自然環境の問題などを取り上げることが多くなってきたことも嬉しく思います。

私は黒川のをキャラクターデザインに展開して、バックやTシャツなどのグッズ作りをすることで「あんこう」に、より親しみを持ってもらい黒川の魅力を全国に発信していきたいと考えています。地域の特産品として定着させ、地元に戻元できないかと試行錯誤しながらのグッズ作りです。

カワイイあんこうのキャラクターも人気が出てきたようです。これからは手軽な物や量産できるものなど開発していきたいと考えていますので、いいアイデアがありましたらぜひお寄せください。



写真 黒川のをあんこうキャラクター入りのあんこうグッズ

製品づくりに限らず、私達の実施する事業として、いろいろなイベントも計画し、実行しています。9月と3月に発行を予定している会誌「あんこう」は重要な広報手段として、私達の思いや活動状況を多くの方々に理解していただき、参加や支援をしていただきたいと思います。

そのためにも、理事として事務局員として、さらに会誌「あんこう」の編集などにも、出来る限り係っていきたくと心新たに思っています。皆様のご支援をよろしくお願い致します。



編集後記

現在、アンコウは海に住む深海魚の名であり冬の鍋物の主役です。でもその名が、生野町の黒川や岡山県の東北部で、何故かオオサンショウウオの呼び名として残っています。

室町初期(15世紀後半)から戦国末期(16世紀後半)にかけて編纂された多くの辞典(節用集など)に、「鮫鱈」という漢字、「あんこう、あんかう」などの読み、「有足魚、心気の薬」などの解説が出てきます。しかし、それ以後は辞典などからオオサンショウウオを指す「あんこう」という呼び方は何故か、消えてしまいます。そして、海の「アンコウ」に名前を奪われ、現在に至っているのです。ただし、前述のように但馬南部から美作北部にかけて、現在でもオオサンショウウオのことを「あんこう」と言っている地域があるのです。

オオサンショウウオを「あんこう」と呼ぶ謂れについては、故虫明吉治郎氏が、「仏僧が座禅を組んで修行をする姿すなわち「安居」(あんこ)からきている」と、平成三年の日本方言研究会で「ハンザキ・鮫鱈の語誌—大山椒魚という動物の名前を考える」という論文で発表しています。

NPO 法人日本ハンザキ研究所の広報誌(二季刊の会誌)を創ることになり、事務局で検討した結果、地元の呼び名の「あんこう」をタイトルに採用することになりました。オオサンショウウオのように長生きできる広報誌にしたいという思いも込めています。原則、毎年9月と3月の発行を予定しています。

この活動に参加や協力いただける方(原則会員の方)、当法人の趣旨に沿う内容であれば、何でも結構です。自由な投稿をお待ちしています。

なお、忙しき折当創刊号に投稿いただいた皆様に御礼申し上げます。

事務局 池上優一

この印刷物は、セブン-イレブンみどりの基金の助成により作成しています。

発行

2008年9月26日

特定非営利活動法人

日本ハンザキ研究所

〒679-3411

兵庫県朝来市生野町黒川 292

電話/FAX: 079-679-2939

e-mail: j-hanken@sasayuri-net.jp

HPURL: <http://www.hanzaki.net>

